源氏物語の作風

―遠景の薫―

清水好子

匂宮巻の名は多く「匂宮」又は「匂兵部卿」「匂兵部卿宮」となっているが、「薫中将」と呼ばれたこともあるそうである。はやく定家奥入（自筆本）には「匂兵部卿宮」として、「このまき一の名かほる中将」とあげている。紫明抄、異本紫明抄、原中最祕抄も「薫中将」の別名をあげること同様である。拾芥抄（故実叢書）源氏物語目録第卅には「廿七（巻イ）薫中将紅梅竹河」としている。これによれば「匂宮」又はそれに類する巻名はなく「薫中将」だけということになる。河海抄は「匂兵部卿　一名薫中将」とし、巻名出所の説明に、「れいの世人はにほふ兵部卿かほる中将ときゝにくゝいひつゞけて」という物語の本文を示している。細流抄が「……又かほる大将ともいへり」と記すのは「中将」の誤りであろう。

いま、匂宮巻の内容をみると、物語はまづ光源氏の後を継ぐ声望あるものとして、匂宮・薫の両人あることを告げるが、次にただちに詳述するのは匂宮のことである。その関係から引き続き同じ明石中宮腹の皇子女、同様もっとも近い血縁の夕霧、その子息や姫君のことが語られる。結局は六条院の栄華が明石上の子孫に引き継がれていること、天下を挙げて光源氏と紫上をいまだに慕うことを述べ、少々結論めいたいい方がなされた後に、薫の事が出てくる。彼に関しては、光源氏の子だというので年少にして破格の栄達が確保されていること、にもかかわらずおのが出生への疑念から、権勢の華やかさを喜ばず、物思いがちな人柄であること、だが光源氏の子孫の栄える社会で、彼の内心の思いとは無関係に上皇や帝が支持することがそれぞれ一段分ほどの量をもって述べてある。

匂宮が物語の人物として、光源氏のすでにあった一面をより強く附与されているのにたいし、薫の性格や置かれている情況は従来にはなかったものだから、意味上からいって新しいし、前述のように量的にも相当大きく扱われているので、物語としてはこちらの方に重みがかかってくることはあきらかである。ところが、巻名では「匂宮」「匂兵部卿」「匂兵部卿宮」等々が主流を占めるのは、これが源氏の物語だからであろう。薫は光源氏の実の子ではないのだからと暗に指摘しているようで面白い読み方になる。拾芥抄にあげるような「薫中将」という巻名はこの一巻の内容を直接的に受けとった場合の呼び方で、その感覚も間違っていないと思う。この巻で薫

が中心であることは花鳥が「雲隠の後は薫大将の年令をもて年紀立べし。此巻にはかほる十四才にて元服し、始めて侍従に任じ、十九にて宰相中将といはれしまで六ケ年の事をのせたり」と説くように、以下物語の年立は此巻を発端として薫の年令をもって基礎とすることからもいえる。雲隠までは光源氏の年令をもって年紀を立てていった、光源氏は物語の主人公であったとするなら、薫は匂宮巻から主人公なのである。具体例を示めすと、薫は

御元服なども院にてさせ給ふ。十四にて、二月に侍従になり給ふ。秋右近の中将になりて御賜の加階などをさへ……

と書き、ついで、

十九になり給ふ年、三位の宰相にてなほ中将も離れず

と、年令と官位昇進の程を詳しく記録する。これにたいし、匂宮は

御元服し給ひては兵部卿宮と聞ゆ。

とあるだけである。皇族の昇進は臣下ほど段階が分かれていないから、匂宮は薫が権大納言右大将になっても兵部卿である。この間十三年経つ（宿木巻）。それ故、匂宮の昇進をもって年立をつくるのは適当でないといえるが、それと、匂宮巻の当初から薫の年令昇進を詳細に書きとめることとは別問題であろう。巻名匂宮なる巻に物語の年立の基礎になる記事が薫に関してなされている点に注意しなければならないのだ。つまり巻名は匂宮であっても、実際の主人公は薫だと作者によって意識されていたことが、これでもって推定できるのである。

ところで、さきに述べた物語人物史上空前というべき薫の性格の特色は、出生について懸念するあまり、現世の栄達や結婚には関与しようとせぬという点であった。これに加えて、作者はいまひとつ特色をつけ加える。それは、身体から、生まれながらにして、不思議な芳香を発するという点である。

だが、物語をよく検討してみると、薫の生まれながら身についた芳香という特徴はのちのちの物語の展開にほとんど影響を与えていない。玉上琢弥先生は珍らしい芳香のため起居動作いつでもそれと知れて、忍び歩きができないから、その生活はおのづと抹香臭くならざるを得ない、芳香は薫の行動を制約するか、といわれたが（「源氏物語評釈第九巻」二二七頁）、そういう場面はのちのちまであらわれない。これが理由になって、薫の恋の成就が妨げられるという事もないのである。たとえば、匂宮巻では末尾の六条院の賭弓還饗の段で、庭前の梅花に、

例の中将の御薫りのいとゞしくもてはやされて言ひ知らずなまめかし。

と賞め、女房が

闇はあやなく心もとなき程なれど、香にこそげに似たるものなかりけれ。

と、讃えるといった風に使われる。竹河巻も同様。橋姫巻では、薫が深夜山道を通って行くと、えならぬ香りに木樵りが目を覚ますと大げさな言い方がしてある。宿直人が被け物の衣の移り香に、身にそぐわずかえって困惑するというのも、やはり礼讃の手段に用いていることになろう。そのほか、宿木巻で匂宮が奥方の中の君の匂いが常とは違うので、薫の近づいたのを気付くとか、同じ巻の後半隙見をする薫の存在を誰と知らぬ浮舟の召使いたちが香のかうばしさに不審がるといった具合である。いわば一場の味つけに使われる程

度で、意味として働く射程は短い。薫とライバルの匂宮もこちらは人工的にではあるが、やはりよい匂いを身につけているから、両者を対照して、事件を劇的に盛り上げてゆくとき、同じ条件である芳香が勝負のきめ手にはなりにくいであろう。浮舟巻で、匂宮が浮舟方の女房をたばかり、薫のふりをして忍び入るところは、「香のかうばしきことも劣らず」とあって、浮舟付きの女房は東育ちだから、薫と匂宮の区別がその匂いだけでつかなかったのか、とにかくここは両者共通の条件が浮舟の運命を狂わせるもととなっている。だが、ことても薫香だけが取り違えの悲劇の理由ではない。貴公子らしいものごし態度も夜目には似ていたし、匂宮は巧みに嘘をつき、声まで薫に似せていたのである。総角巻で、老女の弁が薫だと思って匂宮を中の君に導くところでは、各人の芳香の事は問題にされていない。要するに、浮舟巻のごときは写実という目的のために適切な程度に使われているのであって、筋の起伏に直接影響を与えるものではない。ただ、東屋巻で、中君方の侍女が浮舟の母に、

　経など読みて、功徳のすぐれたることのあめるにも香のかうばしきをやむごとなきことに仏のたまひおきけるもことわりなりや。薬王品などに、取りわきてのたまへる、牛頭栴檀とかや、おどろおどろしき物の名なれど、先づかの殿の近くふるまひ給へば、仏はまことし給ひけりとこそおぼゆれ。幼くおはしけるより、行もいみじくし給ひければよ。

というところ。薫を讃めて、法華経を引き合いに出したのだが、何も知らぬ女房が「お小さい時から勤行をうんとなさったからでしょうよ」と一人合点するところに、かえって、薫の誕生が人力の及ばぬ宿世によるものではないかという感慨を抱かせられる。それはずっと前の柏木巻、まだ光源氏在世中の昔であるが、薫が日ましに可愛らしく成長するので、源氏が

　この人のいでものし給ふべき契りにて、さる思ひの外の事もあるにこそはありけめ、のがれ難かなるわざぞかし。

と、「すこしは思ひ直」すところがあったのを想起させられる。はたして、東屋巻では朋輩の女房が「前の世こそゆかしき御有様なれ」と応酬するが、生まれながらの芳香は薫が人間に生を受けた特別の意味のしるしであるかもしれない。彼がもとよりの出離の志に反し、宇治の女君たちを遍歴する様には、たしかに光源氏とは違った意味で運命の糸に操られているといった感もあり、薫自身も折にふれてそんな述懐をするが、しかし、その場合でも芳香そのものが運命を展開する因子としては働いていないのである。彼の生涯の起伏の源をなすものはやはり出生への疑惑と不安から生じた現世否定の心情であり、姿勢である。思うに、身体から生まれながら発する芳香という神祕的特色は匂宮をライバルに仕立てるための工作なのであろう。主人公を効果的に描写するために、二者一対、対照の法を採るのははやくからこの作者の常套とするところである。その場合、匂宮の好色と薫の道心という風に、性格の相違という一点だけで対照してよいのだが、作中人物自身に対抗意識を植えつけた方が二人の関係がより緊密になり、二者一対の形が内的に結ばれる。「匂兵部卿、薫中将」（匂宮巻）、「匂や薫や」（竹河巻）と世間で囃し立てる状態がかくて強く読者に納得され、印象づけられるわけである。ということは、作者は薫の人間像を匂との対照において容易に鮮明に描き出せるという効用以外に、これから展開する薫の運命に匂宮を強く介入させようと考えているのである。

それに較べて、薫が不義の子たる悩みから発した性格は以後の物語の展開に決定的に影響するものであり、源氏物語が追うてきた人間や人間関係における意味という点でも本質的な問題をはらんでいる。橋姫以下宇治の世界における薫の行動は匂宮巻におけるその人物紹介がなければとうてい理解できない。

匂宮巻での薫の性格についてはじめて触れるのは次の部分である。

…元服はものうがり給ひけれど、すまひはてず、おのづから世の中にもてなされて、まばゆきまではなやかなる御身のかざりも心につかず、思ひしづまり給へり。

「元服を厭がる」「華やかな栄燿栄華を喜ばない」「打ち沈んでいる」…こういわれただけで、物語の人物としては特異な性格であることがわかるが、以上のような変った人柄であるためには、それ相当の理由がなければこの物語の読者は承知しないであろう。性格や心理がなぜそうなのか、どうしてそうなったのかという事について源氏物語は今まで書き込んできたといっても過言ではない。薫の場合も的確な理由が右の引用文の前に述べてあった。すなわち、彼は自分が生を受けるについて、何か忌まわしく指弾さるべき事情があったのではないかと疑い懼れていたという。彼は何をどの程度知り、ひいてはどの程度不安だったのか。

幼心地にほの聞き給ひし事の折々いぶかしうおぼつかなく思ひ渡れど問ふべき人もなし。

とあって、不審や不安は幼時からのものだった。性格形成期のはじめに、決定的な暗影を投げていたわけである。つづいて、

宮（私注―母女三宮）にはことのけしきにても知りけりとおぼされむもかたはらいたき筋なれば、世とともの心にかけて、いかなりける事にかは、何の契りにてかくやすからぬ思ひ添ひたる身にしもなり出でけむ、善巧太子の我が身に問ひけむ悟りをも得てしがなとぞひとりごたれ給ひける。

とあるによって、母には気付いているとさえ知られたくない事件なのである。少年の配慮にしては大人っぽいが、子供でも本能的にそういう問題のかばい方を知っているものである。ましてや母には直接問いがたいこと、彼は母を深く傷け、自分も傷くことを予感している。だが、彼が心中に「…善巧太子の我が身に問ひけむ悟をも得てしがな」と思う、それが古注のいうように、釈迦出家後六年にして生まれ世人に怪まれた王子の故事に関するのならば、薫の思惟はまぎれもなくおのが妊まれた折の事に向っているのだとわかる。さらに、

宮もかく盛りの御かたちをやつし給ひて、何ばかりの道心にてかにはかにかくおもむき給ひけん、かく思はずなりける事の乱れに必ず憂しとおぼしなるふしありけむ…

と、母の過失である事をほぼ察している。その上、

かの過ぎ給ひにけむも安からぬ思ひに結ぼほれてやなどおしはかるに、世をかへても対面せまほしき心つきて元服はものうがり給ひけれど、

と、父についても、その人が既に此の世に亡いことも知っている。「かの」というあきらかな指示は、必らず柏木を指すととるべきかもしれぬ。前の引用のなかにも「かく思はずなる乱れ」と確かな言い方がされていた。自分が妊まれるについて、何がどのようにして起ったのか、薫は具体的な経緯をかなり知っている様である。つま

るところ、彼は自分が光源氏の子でないことを相当詳細な裏づけをもって知っていると思われる。

そうだとすれば、薫の不審と不安を述べる前段に彼の異常な栄達が列記してあるのは不気味である。これはすべて準太上天皇六条院の晩年の嫡子という出身にたいして授けられたものだからである。彼の不審と不安を告げる箇所の前段、つまり、この人物が匂宮や明石中宮、夕霧につづいてはじめて筆に上せられるところに、

二品の宮の若君は院の聞えつけ給へりしまゝに、冷泉院の帝、とりわきておぼしかしづき、后の宮もみこたちなどおはせず心細うおぼさるゝまゝに、うれしき御後見にまめやかに頼み聞え給へり。

と、いわれるのである。玉上琢弥先生の評釈には「二品の宮」というと重々しく響く、するとこの若君も重く感じられる、と説かれる。又、「冷泉院の帝」というのも、「冷泉院」とだけいうより重いし、ついで「后の宮」と出るのも重いとある。その通りで、ここで連枝として母宮を二品に進めた当帝の好遇が察せられるし、上皇・皇后からなみなみならぬ配慮を受ける若君だとは言葉遣いから早速に感じ取れるようになっている。

御元服なども院にてせさせ給ふ。十四にて二月に侍従になり給ふ。秋右近の中将にて御賜の加階などをさへ・・・いそぎ加へて大人びさせ給ふ。

と、薫の官界における昇進は異例である。日常の起居についても、

おはしますおとゞ（私注―上皇御所）近き対を曹司にしつらひなど、みづから御覧じ入れて、若き人も童下仕まですぐれたるをえりとゝのへ、・・・上にも宮にもさぶらふ女房のなかにもかたちよく、あてにめやすきはみな移し渡させ給ひつゝ、院の内を心につけて、住みよくありよく思ふべくとのみ・・・

と、冷泉上皇の御所内、御座所近く一部屋賜って、常住そこを居心地よく思ふようにと、召使いから調度まで「みづから御覧じ入れて」、さながら寵愛の皇子のような扱いである。光源氏の子孫が政権を握る世の中で、光源氏の擁立した天皇が上皇になる。その発言力の強大さは察するに余りある。薫はその人の鍾愛の貴公子だ。当時の権力機構のなかで彼がどんなによい条件を具えていたか、いかに前途ある貴公子であるか、これだけいわれて見落す者はいないだろう。

が、それらはすべて「院の聞えつけ給へりしまゝに」なされたことだった。つまり六条院光源氏から冷泉院への遺言があったからである。冷泉院上皇は秘密の父を太上天皇に準ずる扱いにしてなお満足できぬ気持だった。その遺言の遂行には喜んで全力を尽すであろう。秋好中宮も昔養女として受けた恩、とりわけ立后の後見の恩顧は忘れてはならぬものゆえ、光源氏の遺児の上に庇護の袖を覆うことは本望であろう。いづれも薫が光源氏の子だと信じてのことである。真実への無知に立って、最高の権力者たちが善意の限りを尽しているのである。もっとも薫の方も冷泉院が光源氏の子だとは知らないから、眼かくしされた不義の子同士が一人の死者の縁で、此の世のきらびやかな権勢の場でしっかりと手を握っている図がここにある。冥々の力が現出するこんなかりそめの人間図を描いて見せるのも作者の好んでした事ではないだろうか。匂宮巻以後は物語自身積み重ねてきた世界があるので、文字面の意味の背後に底深い過去をいくらでも揺曳さすことができる。作者は物語の世代が改まると

その方法を存分に使ってゆく。匂宮以下三巻、とりわけ薫の出てくる匂・竹河巻はそれが有効に使われていて、いわゆる第一部第二部とは違った巻々の仕立方が見られる。

そう思ってふり返ってみると、匂宮巻冒頭にはすでに思わせぶりな一行があった。

ひかりかくれ給ひにし後、かの御影にたちつぎ給ふべき人そこらの御すゑ〴〵にありがたかりけり。おりゐの帝（私注―冷泉院）をかけたてまつらんはかたじけなし。

時代が変り、子供たちの世の中になったというとき、冷泉院の事が口にされると、どうしても源氏物語の読者は藤壷と光源氏の過去を想い出さずにはいられない。「おりゐの帝をかけたてまつらんはかたじけなし」と、勿体ないから触れぬといわれると、それがかえって、あれこれ思わせて、意外なところに飛び散り、つながってゆく潜かな、御しがたい血への関心を喚び起す。短い一言ほど暗示の力は大きい。匂宮巻は冒頭それを果している。この問題は物語執筆の大きいモティーフであっただろうと思われる。

ところで、現在の破格の栄誉ともっと輝しい未来がすべて光源氏の子たる事によるなら、そうでないと世に知れたとき、彼の生活が根こそぎ崩れるのも目に見えている。元服以来の目覚ましい昇進と上皇・皇后の絶大の庇護をこまかに述べたあと、薫自身が出生の秘密を知って悩む段を設けた対照の方法は劇的である。この二つの段を繋ぐのにすこしも説明の言辞を弄せず、ただはなばなしい事実と、当人が秘密の深淵を知っているという事実を並べる、それはいかなる多くの説明にもまさって薫なる人間の置かれた状態と苦悩をあらわすものである。

作者は本人が不義の子たることに気付いていると述べたあともさらに、当帝はもとより明石中宮も夕霧も薫を重んじたという一段をつけ加えている。

うちにも母宮の御方ざまの御心よせ深くて、いとあはれなるものに思され、后の宮はたもとよりひとつ御殿にて宮達もろともに生ひ出で遊び給ひし御もてなしをさ〴〵あらため給はず、「末に生まれ給ひて心苦しうおとな〳〵しうもえ見おかぬこと」と院のおぼしのたまひしを思し出で聞えつゝ、おろかならずおもひいできこえ給へり。右の大臣（私注―夕霧）も我が子どもの君達よりも、この君をば、こまやかにやんごとなくもてなしかしづき聞え給ふ。

と、又しても光源氏の遺言。「大きくなるまで見届けてやれないでふびんだ」と言ったのが明石中宮をつよく規制しているのである。それに中宮所生の皇子たち―匂宮たち―と一つ屋に成長したころの「もてなし」を改めないとは、六条院南町の寝殿の西東に住んだ幼時を指すのであるが、それとて光源氏がおくびにも出さず嫡子として扱ったからである。薫の現世的幸福が云々されるときはかならず光源氏の遺言や思い出が出てくることにはくれぐれ注意しよう。

右大臣夕霧も薫をかしづく一人だが、彼は若菜上巻以来、柏木女三宮の関係を察していた人物で、柏木の臨終には形見と遺言を受け、柏木の亡霊が夢にあらわれることもあって、いよいよ二人の間をいぶかしみ、真相を糺さんと光源氏に迫る事もあった（横笛）。彼は何ほどかの疑惑を抱いたはづであるのに、ここでは何食わぬ面もちで我が子以上に薫をかしづく姿を現わすのはどうしてだろう。この

権勢家は往年の疑念をどう始末したのか。光源氏の名誉のため、一門の繁栄のため万事嚥み下したのか。薫はそれを知らぬが、読者は過去の経緯を全部承知しているから、こういう夕霧をみることは気がかりだ。この物語の作者は読者のそんな気がかりを知っていて、彼らがそれを胸に潜めたまま、薫の次々の栄誉をみることを、その時のかすかな不安に蝕まれている心理を予想し期待している。そのために、彼女はこの問題をわざと説明せず、夕霧についての事実を書くだけにしておく。気がかりは真正面から取り上げず、呼び醒ましたままで放っておくと、ますます気になるのだ。冒頭の冷泉院への言及もそうだった。ちょっと一言かすめた言い方が、苦い過去を呼び起すのだった。匂宮巻はあちこちにそういう不安の影を持っている。作者は薫の出てくる巻にはそうするのだ。そのような事が可能なのは前にもいったように、この物語が自分自身の世界に過去を持っているからなのである。

薫の性格の独創性は彼自身が出生の秘密を知って悩む人であることだ。この物語はみづからの過去を持つため、薫誕生という出来事は何十年か前の冷泉院誕生なる事件を改めて照し出していた。両者はたしかに相照応する事件であったが、その根本的な相違は、後年の不義の子の誕生が〃知る〃という点でいちじるしく人間的な場に置かれていることである。冷泉院の誕生も当事者には知られていたが、裏切られた桐壺帝は遂に知らなかった。光源氏は女三宮の懐妊を聞いて、父帝も勘付いていたのかもしれないと思うが、藤裏葉までにそのように受けとれるところは無いようだ。須磨巻に源氏を救いに来る桐壺帝の亡霊はその点に無頓着の様子である。夜居の僧の密奏で、冷泉院も事実を知るが、彼の煩悶は実父を如何に処遇するかに傾いている。そして、光源氏がやがて準太上天皇になる、―つまり、桐壺巻の予言が実現する過程が印象にのこる。藤壺の、我が子が皇太子を廃されるかもしれぬという恐れこそ薫の不安に通じ、彼女の出家も薫の仏道志望に似通っているが、第一部のこの事件は光源氏の運命を展く予言や夢想の顕示として扱われるのが主眼で、人間的苦悩が前面に押し出されているとはいいがたい。薫の誕生の場合はこれに反し、多くの人が〃知る〃ことの苦痛をまともに浴びるのである。柏木と女三宮密通はたちどころに光源氏に知られてしまったし、両人もすぐ知られたことを知って苦しんだ。女三宮は光源氏の態度に生涯をともにできぬ冷やかさを悟って尼になったし、柏木はその威厳に屈して命を縮めた。光源氏も両人のそのような苦しみ方をじっと見て知っている。そして裏切られた苦しみを持ち続けながら、世間に対する態度を考えている。さらに、前にも述べたように、第三者である夕霧もはじめからこの事件の立会人としてかなり真相に近くいる上、朱雀院でさえ女三宮の慶事を聞いて、表面だけを見て単純に喜ぼうとはしていない（若菜下）。薫の誕生は、かつての冷泉院のときのように、予言や夢想に導びかれるのでなしに、此の世の人間が関知する事件として、倫理の問題として発展する性格を持っている。話のなかには、柏木の猫の夢のように、宿世を暗示する一段もまじっているが、第二部の密通事件の方がずっと此の世的で小説的な題材になっている。匂宮巻に書かれる薫はその線上に生まれた人物である。彼の性格形成が出生の秘密を知るというところに置かれているのは、この物語が辿ってきた人間の捉え方の自然の成り行きであった。薫という人物は源氏物語が第一部

から第二部へと書き続け、書き深めることによってたぐり出されたというべきである。

匂宮巻で薫の生き方は十分根拠を示されたわけで、この巻がなければ橋姫以下の薫の行動は理解されがたい。しかし匂宮巻の書き方は他の巻々とたいそう違った印象を与える。それが作者別人説の出る所以でもあろうか。

私のみるところ、この巻が他と違った印象を与えるのは、形態上の特色からくると思う。この巻はいわゆる〃場面〃—絵になるような見せ場—を持っていないのだ。

源氏物語の一巻制作の方法の基本的な型は、一つの巻のなかにいくつかの〃場面〃を用意し、〃場面〃に語らせることである。そこでは、時と所、季節と場所が指示してあり、一日のうちの時間や背景も指定される。そこへ主人公たちがあらわれ、対坐、対面し、何ほどかの会話をし、その内に事件の展開が計られる。多くの場合、主人公たちは歌を詠みかわすが、これは彼らの感動の極まりを示すものである。読者もさながら作中人物の気持になって、この場に参加するように、作者は場面の情趣を伝える事に努力する。つまり描写に力を振う、といったものである。匂宮巻にはそれが一箇所も出てこない。他に例のないことである。理由としてこの巻の短少さがあげられるかもしれない。けれども、短い巻ならばほかにいくらもあるので、花散里・関屋・篝火などは量的にはこの巻よりもはるかに短少だし、次の紅梅も短い巻である。が、これらの巻はいづれも〃場面〃を持っている。関屋・篝火などは一篇が一場面によって成立しているといってよいであろう。これらに較べると、匂宮巻は全篇光源氏の子孫の紹介説明で終っていて、まったく場面描写を持たない。わづかに巻末に六条院に賭弓の還饗があって、薫も匂宮もこれに加わるので、いかにも一幕出来そうであるが、これがとうとう何事も起らずじまいである。賭弓の還饗とは年中行事だから、一年のうちの季節もはっきりしているし、「雪いさゝかうち散りて艶なるたそがれ時」「お前近き梅いといたくほころび」と、背景、道具立も揃っていて、一箇具体のある場面があらわれそうな上、薫が登場し、女房たちからちやほやされる一こまもあるが、あとがない。匂宮巻の末尾を作者は一場面として仕立てあげる意図をはじめから持っていないのであろう。だから巻末の結びを次のようにしたのだと私は考える。

右のすけ（私注—薫）声加へ給へや、いたうまらうどだゝしやと宣へば（私注—夕霧が）、憎からぬほどに神のますなど。

巻末をいいさしたものは他にも数巻あり、それぞれ別箇に理由を考えるべきだが、ここは、これ以上進んで薫の声や姿を描写する気がないことを示すものだ。作者は一往は場面らしきものを用意したが、最後まで書き切るつもりは無かった。ここをわざわざ一場面に仕立てる意図は無かったのである。それではどうして、こんな中途半端なものを最後に附け足したかというと、おそらく作者にとって、一巻の物語が終始解説の文章で埋まり、場面を持たぬ、つまり描写がないということは、物語として体をなさぬと考えられていたからではないか。このことは源氏物語の作風の基本的な性格にかかわるものだが、これがいわゆる情趣性を支えているものだといえよう。この巻のなかで、匂宮が薫に対抗して薫香に意を用いるところで、急に美文調になってうたい上げるのも、一巻が場面の描写を持たず、

ために生じた情趣性の欠除を補おうとしたのではなかろうか。

かくて、私たちは世間の人気を集めながら、憂い顔の貴公子の姿や振舞いを、その生活の場面のなかで見ることはできない。源氏物語の読者なら、薫の舞台姿を要求せずにおかないだろう。作者の才能の一つはすぐれた描写力にあり、読者は長くその味わいに堪能し、同時に鑑賞力を育てても来た。これは匂宮に関しても同様である。そこで紅梅・竹河巻が用意された、と考える。紅梅巻は致仕大臣の子孫—つまり昔光源氏の好敵手としていつも連れ立って登場した頭中将の一族の家に、竹河巻は、これも光源氏の物語で馴染深い玉鬘の嫁した髭黒大臣の家に、それぞれ場面を転じ、しかしながら、どちらもそれぞれ匂宮と薫の人柄が浮び上るように描いている。それは宇治の巻々を理解する上に必要だし、作者自身もこの巻々が宇治の世界に連なることを教えている。紅梅巻で

…通ひ給ふ忍び所多く、八の宮の姫君にも御志浅からで、いと繁う参うでありき給ふ。

と記し、竹河巻の薫についても

御息所（私注—玉鬘の長女）もかやうにてぞおはする。宇治の姫君の心にとまりて覚ゆるも、かうざまなるけはひのをかしきぞかしと思ひゐ給へり。

と書く。紅梅巻の八宮が宇治の人であるかどうかはわからないけれど、勢力のない宮様であるとは想像がつく。竹河巻では不意に都以外の山里の地名が出て来て、読者は耳をそばだてた事であろう。「八宮」なる呼称にしても、式部卿宮とか中務宮といわれぬ無官の皇族の出現を異様に思ったにちがいない。これも度々触れた仄めかしの一語である。

ところで、作者はなぜ匂宮巻で一場作らずに、中途半端でおいたのだろうか。その事の考察は竹河巻の性格と関係してくる。すなわち、作者はなぜあの巻だけ語り手が変る、他家の女房に語らせるという枠組みにしたのか、という問題にいたるのである。

すでに述べたように、匂宮巻は巻名匂宮であり、匂宮と薫を並べて紹介しているが、どちらかといえば薫の方に重点をおくこと、巻末の夕霧邸の扱いでも顕著である。その薫は光源氏の嫡子というので世間に重んじられているが、本人はかなり事実を知っていて、一切の現世的幸福を空しいとし、年少にして道心を持つ者とされている。薫という人物を造型する点で、〃知る〃ことの意味は人間の問題としての深まりを見せているし、これはすでに彼の誕生の時点において、当事者や周囲の人々の内面的課題としてあらわれていた。右大臣夕霧もその一人である。ところが匂宮巻において、彼は薫を光源氏晩年の愛子として、我が子以上に大切にかしづき、六条院の還饗の席にもわざわざ招待しては、いやが上にも一座の花形にしようとしている。前述のような薫の人物設定を終った作者が、これを特定の一場面の中で描写しようとするとき、つまり特定の人物に対坐させ、動かし、語らせようとするとき、それは当然出生の秘密を知るが故に〃思ひしづまりたる〃姿を描き出さねばならないだろう。それ以外の薫像はいたづらに印象を混乱させ、作品にとってマイナスだからである。だとすれば、そのような薫を、夕霧のような人物と対坐させて描くことはまことに困難である。読者は夕霧の過去の内面を知っているから、薫にむかう夕霧といった場面で、薫の本質を描き出してゆくことは、複雑で錯綜した問題を提出する。作者の

意図は真相をまったく〃知らず〃、また〃知ろうとせぬ〃世間の中に点在する〃知る〃薫を描き出すことにある。匂宮巻で、「薫秘密を知って悩む」段を、「薫政界への目覚ましい門出」の段と「薫最高の権力に支持される」段に挟んだ排列照応は問題の所在を示唆している。世間が何も知らねばこそ、それだけ薫の不安は大きく、それだけ薫の独創的な傾向は明瞭化してゆく。とすれば夕霧の主宰する六条院の宴は適切な舞台ではない。物語史上未曽有の人物は単純明快に提示され、純粋な印象を与えなければならない。匂宮巻の場面はかっこうをつけただけで終る。

竹河巻は以上の様な要請から構想されたと思う。巻のはじめに、

これは源氏の御族にも離れ給へりし後の大殿わたりにありける悪御達のおちとまり残れるが、問はず語りしおきたる、紫のゆかりにも似ざめれど…

と、源氏方とは無縁な女房に語らせたのは彼女たちが事情を知らぬ世間の眼だからである。〃社会の中の薫〃といっても、この作者の現実再現の方法は女房の視線が捉えた視野の中にしかない。他家の女房が駆り出される所以である。竹河巻は以上の理由から、髭黒一家の出来事を語る形をとりながら、ほんとうは〃憂わしい薫〃の姿を写し出すために設けられたものである。

この巻が薫のためのものであるとは、ほんの形の上からでも証拠をあげる事ができる。

まづ巻のはじめ、さきほどあげた冒頭につづいて、

…紫のゆかりにも似ざめれど、かの女どもの言ひけるは、「源氏の御末々にひがごとどものまじりて聞ゆるは、我よりも年の数つもり、ほけたりける人のひが言にや」などあやしがりける、いづれかまことならむ。

とあることである。髭黒大臣家―藤氏の女房たちが、「源氏の御末々」について言い及んでいるのは不審ではないか。それを筆録者が伝えるのも。匂宮巻冒頭の「おりゐの帝をかけ奉らんはかたじけなし」と同様、思わせぶりで気がかりだ。花鳥余情の注は、冷泉院や薫出生の件、玉鬘の本姓のことを指すとし、以後古注これに従うものが多いが、私も同感である。ただ私は弄花抄のいうように、玉鬘の件は含めず、薫冷泉院のことのみとするに与したい。しかうして、私は薫の事のみを指すと考えたい。玉鬘の女房から話を聞いた筆録者は「いづれかまことならむ」といっている。彼女たちの伝えるところと、今までの話とどちらが真説だろうかというのだから、竹河巻に源氏の子孫の話が出るのははじめから予告しているわけである。しかも玉鬘の女房たちは自分の主人の事を語りながらも、源氏の子孫についてもこちらの方が本当なのだという自信をもって、したがってそれにかなりの重味をかけて話す姿勢を明示しているわけである。

次に巻名出所の箇所がすべて薫中心の場面である点、この巻が薫のためのものだと端的に示すものだ。竹河なる巻名は物語の中の歌及び詞をもって命名したとは諸注の指摘するところだが、その言葉の出る場面を吟味してみると、すべて薫が中心人物であり、歌は彼が詠じたものである。

第一の場面は正月二十日梅のころ。したがって催馬楽「竹河」にふさわしい男踏歌の折よりは遅れるが、薫が玉鬘邸を訪問して、夕霧の子の蔵人少将やこの家の子息と小宴を持ったときのことである。

この蔵人少将は玉鬘の姫君に熱心に求婚していて、父夕霧や母北の方も息子のために折々玉鬘に懇望している。薫も同様必ずしも憎からず思うものゝ、例の気性なので、蔵人少将の様に積極的な態度には出ないが、その物静かさがかえって女房たちの評価を上げている。この巻ではかように薫と蔵人少将がしばしば同時に玉鬘邸を訪れる場面があって、両者を一組にして対照的に扱うのであるが、これはいまや作者の常套手段と目してよい二者一対対照の方法である。人物描写に適切な方法として作者の発明になるといえよう。本当は匂宮を使うはづだが、これは本番にとっておかねばならない。で、竹河巻では匂宮はわづかに一二度名前を挙げるにとどめてある。この巻ではもっぱら蔵人少将が薫を照し出す役割だが、二人連れ立ってあらわれるとはいえ、竹河に関するせりふや重要なしぐさは彼には一つも割り当てていない。

たとえば、いまの玉鬘邸小宴の場でいうなら、来客のもてなしのため、玉鬘の無骨な息子が仕方なく季節外れの「竹河」を謡ったことにはじまる。薫はそのときも蔵人少将に立ちまさって、打ちしめった風情が御簾の中の女房の注視の的だったが、盃が重なると、「水駅（みなうまや）にて夜更けにけり」と一言いい残して退散した。「水駅」とは男踏歌の夜の接待のことである。翌日、薫の方から贈った歌が

竹河のはしうちいでしひとことに深き心のそこはしりきや

というものであった。玉鬘の息子の返しにも竹河なる言葉が使われているが、これは当然の作法である。

次の例は、蔵人少将が熱烈に慕い、薫も少しは惹かれていた玉鬘の姫君が冷泉院上皇の妃に上った翌年の男踏歌の折のこと。ここでは自然行事につきものの竹河が出るわけだが、作者は薫を歌頭にしている。目立つ役である。ライバルの蔵人少将も楽人にしてある。踏歌の人々は内裏、上皇御所と竹河を謡って廻り、御前に進み出るが、蔵人少将は謡いながら、去年この歌が謡われた玉鬘邸の小宴が思い出されてただならぬ思いであった。薫はどう思ったか、そのことは書いていないが、翌日お妃づきの女房からの歌は薫の方に贈られているのである。

竹河にその夜のことはおもひいづやしのぶばかりの事はなけれど

（去年お妃のお里邸（さと）で竹河を謡ったときのことを思い出されますか、大して思い出にするほどのことはございませんが）

熱心な蔵人少将にではなく、女房たちの関心はあくまで薫にあるのだ。返歌は

ながれてのたのめむなしき竹河によは憂きものと思ひしりにき

源氏物語のなかで、登場人物の歌は感情がもっとも盛り上ったときにあらわれる。いいかえれば、そうした歌は本来主要人物が詠じるのであり、それ故巻名にも選ばれるのである。

さらに、ここにつづいて、冷泉院が薫を呼んで、こういいきかす。

故六条院の踏歌のあした女方にて遊せられたるいとおもしろかりきと右の大臣（私注―夕霧）の語られし、何事もかのわたりのさしつぎなる人かたくなりにける世なりや・・・

冷泉院の懐旧はこの巻が鬚黒一家の出来事を語る体ながら、機会があれば光源氏につながる過去を呼び出そうとしていることを示す。その上、かの六条院の男踏歌（初音巻）には今の右の大臣夕霧は薫と同じように竹河を謡う列にあったが、同時に薫の父、青年だった柏木も加っていたし、未亡人玉鬘は六条院の姫君として、これを見

物していた。冷泉院の懐旧の一段をつけ加えたことは、竹河なる巻名がこの場限りのものでなく、物語自身の奥暗い過去に響き合うものであることを知らしめる。その過去は蔵人少将にかかわるものでなく薫にかかわるものだとは読者が百も承知しているのである。竹河に関する場面で蔵人少将は表面いかにも派手に動くが、つまるところこれは反射鏡にすぎないから、巻名出所になるような歌は詠ませるわけにゆかない。かの玉鬘邸小宴の日も彼は薫よりもはやく歌をやりとりしているのだが、それは季節にふさわしい梅の花を詠みこんだものだった。物語の筆はかくして鬚黒一家の事を語りながら、暗々裡に光源氏につながる過去と薫の人柄を意識させずにおかぬ工夫をこらしているのである。

だが、こういう人もあるかもしれない。竹河巻随一の華麗な見せ場である姫君囲碁の場面に薫は登場せず、蔵人少将だけが隙見をして思いを然やしているではないかと。

いわれるように、ここは「三月(やよ)になりて咲く桜あれば散りかひくもり、大方の盛りなるころ」と季節や背景からして明るく賑やかだ。この桜はやがて「お前の花の木どもの中にも匂まさりてをかしき桜を折らせて」と、小道具にも使われる。登場する姫君には、

その頃十八九の程やおはしけむ御かたちも心ばへもとりどりにぞをかしき。姫君はいとあざやかに気高う今めかしきさまし給ひて、げにたゞ人にて見奉らば似げなうぞ見え給ふ。桜の細長山吹など折にあひたる色あひのなつかしき程にかさなりたる裾まで愛敬のこぼれ落ちたるやうに見ゆる御もてなしなどもらう〳〵じく心はづかしき気さへ添ひ給へる。今一所は薄紅梅に御ぐしいろにて柳の糸のやうにたをたをと見ゆ。いとそびやかに澄みたるさまして重りかに心深きけはひまさり給へれど、にほひやかなるけはひはこよなしとぞ人思へる。碁うち給ふとてさしむかひ給へる、かんざし御髪のかゝりたるさまどもいと見所あり。

と、衣裳の色目を細かに書きわけ、姉妹の人柄や動作姿態なども絵に画かば画けるようにしてある。しばらく兄弟の公達が碁の判をして立ち去ったあと、姫君が「うちさし給へる碁打ち給ふ。…暗うなれば端近うて打ちはて給ふ。御簾巻き上げて…」という時、例の少将がやってきて、隙見をするのである。だから今までの光景はすべて蔵人少将の視野に納められた事になり、「夕暮の霞のまぎれはさやかならねど、つく〴〵と見れば、桜色のあやめもそれと見分きつ。」という事になる。たしかにここは竹河巻随一の色彩的な場面で、げんに徳川美術館蔵の源氏物語絵巻でも、もっとも美麗な画面として残っている。大阪女子大蔵「源氏絵詞」に徴しても、ここが後世まで絵にすべき箇所として受け継がれていたことがわかる。

しかし、仔細に検討してみると、ここの場面の仕立て方が他の巻々のそれとかなり違っているのを見出す。一言にしていえば集中度が低いといえようか。前述したように、「三月になりて」といいはじめ、登場人物の衣裳から動作、背景の桜にいたるまで具象的な道具立はすべて整った上、兄弟の貴公子がやってきて、美しい女きようだいにものをいいかけ、亡き父を慕う気持を吐露するのだから、舞台上の動きも十分なのだが、次に

かんの君、かくおとなしき人の親になり給ふ御年の程思ふよりはいと若う清げに、なほ盛りの御かたちと見え給へり。

と出てくるのはどういうことか。玉鬘ははじめからこの場に同席していたのだろうか。この段のはじまり方には、

のどやかにおはするところはまぎるることなく、端近なる罪もあるまじかめり。

と、姉妹の姿を点描するに際して、玉鬘の存在を予想させるものはない。兄弟が庭前の桜から幼時の父母の思い出を語るが、目の前に必ず母がいるともとれぬ口調だ。が、それらは玉鬘の存在を必ず否定する理由にもならない。要するに、ここまでの文章では、玉鬘の居ることは気づかせられないが、居ないとはいえない書き方なのだ。しかし、次に「かんの君、かくおとなしき人の親になり給ふ御年の程よりは云々」という文章が出てくると、前段と違和を感じさせられる。「かんの君」という呼び方が第一公的で、内輪の団欒の場面にふさわしくないからであろう。「上は」とでもあってほしいところだ。だいたいにこの巻では玉鬘の女房がおのれの女主人のことを語るのに、「大上(おおうえ)」と一例あるほかはすべて「かんの君」「かんの殿」で通すのはいかなる理由からだろうか。私はここにも、この巻発想の基盤が思わず露呈しているように思うのだ。つまり、作者は玉鬘の女房たちに自家のことを語らせるという枠組みは作ったが、その視点に徹することができなかったのだ。作者の本心は光源氏の歴史に連る薫の事を書こうとしているので。

さらに、この文章全体が前段の描写の文章とは異質であることがいえるが、それは次のようなところである。すなわち、

冷泉院の帝は多くこの御有様のなほゆかしう昔恋しう思し出られければ、何につけてかはと思しめぐらして、姫君の御事をあながちに聞え給ふにぞありける。院へ参り給はむことはこの君だちぞ「…略…」など申し給へば…

と続くと、この数行は碁打ちの場面に関するものでないことは明白になる。したがって、息子たちの返事も現在この場で発せられた言葉ではなく、かね〴〵この件に関して主張していた意見と思われる。このあたりになると、あきらかに物語は一箇具体の光景を去って、事態の説明に変ってきているのだ。場面として集中度が足りないと感じさせたのにはかかる理由があったのである。弄花抄はここを「玉かつらに向ひて申給座の体にあらずかね〴〵いひし事かけり」といっているのは我が意を得たように思う。もっとも岷江入楚は「以外相違なり」と否定しているが。しかし、作者はこの点に気付いていて解説から描写に戻る工夫をしている。玉鬘の息子への返答にあたり、

「いさや、はじめより…略…殿おはせましかば行末の御宿世々々は知らず、ただ今はかひあるさまにもてなし給ひてましを」など宣ひ出でて、皆ものあはれなり。

とするところである。「など宣ひ出でて」の「宣ひ出づ」は、いまその場でいろいろ話した揚句、そのような事まで言い出したという雰囲気を出す。「など…」までは息子の会話のなかの『春宮はいかが』など申し給へば」に対応するもので、玉鬘も以前から息子の上のごとき意見には何度か自説を述べていたのであろうと想像できるが、「…と宣ひ出でて」とし、「みなものあはれなり(一座しんみりなる)」とくれば、姫君碁打ちの現場の感が甦える。

このあと、蔵人少将が隙見をすることになるのだが、彼は眺めるだけで、登場しない。したがって、この場面が求婚者蔵人少将を加えて、何らかの変化を起す事はなく、物語的に発展する余地はない。

そこでは蔵人少将はついに詠歌の機にも恵まれないし、桜についての数首の歌は後日談として附加された落花の場面で姫君と女房が誦和したものである。題材上、権勢から外れつつある大貴族の家庭というかなり面白いものを扱い、ある程度その淋しい華麗さを出すのに成功している竹河随一の美しい場面ながら、第一部や第二部の記憶にのこるいくつかの代表的な場面—桐壺野分段、賢木野宮段等々—とは異った感を与えるのは、もう一つ作者の筆がうたわない、陶酔がないからである。それはこの場面が理由あってのことではあるが、構成が散漫粗略なのと、物語として筋を深める方向を与えられていなかったからである。それは後の橋姫巻で、季節は正反対の秋、霧の夜明け方と背景はすっかり異なるが、もっと落魄した姫君たちを薫が隙見をする場面で、腰を据えて、意味を追及すべきものであった。薫と蔵人少将を対照して書いて来た作者の意識の中には竹河隙見と橋姫の隙見を並べてみようとする考えがあったと思う。だから、作者は薫の出ない、蔵人少将だけが隙見をしている場面に意味感情を盛る本格的な努力をしなかったのだ。すなわちいかに華麗多彩な場面が振り当てられようと蔵人少将は主人公ではないのである。

では蔵人少将はいかなる意味で薫を照し出していたのか。

玉鬘が答えを出しているから、以下に引用しよう。竹河巻末尾、何年かたって蔵人少将が宰相中将に栄進して玉鬘のところにやってくるところが書いてある。彼はまだ、冷泉院女御になって皇子もいる玉鬘の姫君のことが忘れられず、

おほやけのかずまへ給ふよろこびなど何とも覚え侍らず、わたくしの思ふことかなはぬ嘆きのみ、年月に添へて思う給へはるけむ方なきこと。

といって涙を拭うのである。玉鬘はこれをみて、我が息子と較べ、何と暢気なことをいっていることか、「故殿おはせましかば、ここなる人もかかるすさびごとにぞ心を乱らまし」と、もし髭黒在世ならば、わが家の子供たちも官位昇進など望み通り、そんなことにあくせくせず、この人のように色恋に現を抜かすであろうと息子たちをあはれがるのだが、ここで玉鬘は髭黒遺児と夕霧の愛子との差を指摘しているわけだ。それによって、さらに蔵人少将と比較された薫の特色が浮び上ってくる。薫は蔵人少将に比較しても抜群の栄達ぶり、この時はやくも中納言である。が、その薫は蔵人少将のように恋には熱狂的になれない姿を呈していた。それがかえって人々の人気を掻きたてはしたが。

その点をよくよく嚙みしめるようにというのであろう、物語作者は宰相中将になった蔵人少将の年令をここで書きとめている。「二十七八の程の、いと盛りににほひ……」と。この時の玉鬘の長男は右衛門督、次男は右大弁で、みな非参議の嘆きを喞っていたとある。一方薫が宰相中将だったのは何才か。匂宮巻に「十九になり給ふ年、三位の宰相にて、なほ中将も離れず」とあった。じつに二十才前である。前にあげた竹河の姫君囲碁の場面で、玉鬘の長男は左近中将で「二十七八の程にものし給へば」とことわってあった。中将は家の子の進むべき官職であるが、あれから数年たって三十過ぎてもなお非参議なのだ。薫はこのとき中納言になって、年は二十三才、政界における位置というものがこれでもって正確にわかるようになっている。それぞれの家の子の年令が官職とともに折につけて附記してあるのは何の気なしにしたのではないのだ。玉鬘の男の子のたちに比較すれば、ずっと恵まれた夕霧の最愛の息子にもまさって、栄

華の極みをゆく薫が蔵人少将と対照的に、恋にも夢中にならず、考え深げに静かに出入りする。そういう薫の姿が竹河巻には描き出されているのである。

それらは他家の、藤氏の女房の眼に映ったおのづからな薫の姿であった。彼女たちには主家の浮沈こそ重大事であったから、それに無関係な他家の内情を詮索する必要もなかったし、光源氏があれほど隠し、遺言にも配慮した秘密を知り得もしなかっただろうから、それだけにこれらの人々の眼に映る事実は無私で恐ろしい。薫の目覚ましい栄達も、連れ立ってやってくる蔵人少将とは反対のうち湿った様子もことごとくこの家の女房の目には見えていたが、次のような事実もまたいかんともしがたく人々の目に映じ、耳を打ったのである。

まづこの人たちは薫のことを次のようにいい出す。

六条院の御末に、朱雀院の宮の御腹に生れ給へりし君、冷泉院に御子のやうに思しかしづく四位の侍従、そのころ十四五ばかりにて…

これが当時世間に通用の薫の公式な身上書で、必要にして十分な要約である。光源氏の子だと一点疑わぬ口吻だ。もっともなんのために薫が問題になるかといえば、

かんの君は婿にても見まほしく思したり。

とあるように、この家の姫君の縁組の相手だからである。婿がねとして、家柄・後見がよい上に、いま一つの好条件は

いときびはに幼かるべき程よりは心おきておとなおとなしくめやすく、人にまさりたる生先しるくものし給ふ。

と、静かな落ちついた人柄が挙っている。匂宮巻を読んでいるわれわれには、これがほかならぬ出生の秘密にかかわる憂悶から出たものだとうなづけるが、他家の女房は知るはづもなく、逆に薫が避けようとする結婚へのプラスとして働く。観客や読者は万事承知しており、舞台の上の人物だけが事情を知らずに、ちぐはぐな動きをする面白さ、これは娯楽的な読み物や芝居につきものの古今不変の作劇術である。

そうして、次のあたりから、無心の疑わぬ眼の気味悪さが出てくる。彼女たちは薫をほめて、

かたちのよさはこの立ち去らぬ蔵人少将、なつかしく心はづかしげに、なまめいたる方はこの四位の侍従の御有様に似る人ぞなかりける。六条院の御けはひ近うと思ひなすが心ことなるにやあらむ、世の中におのづからもてかしづかれ給へる人なり。

蔵人少将は夕霧の子だから光源氏の孫、「かたちのよさ」はさもあろう。薫について、誰の目にもはっきり見える容貌のことはさておいて、人柄や感じがよいというのが曲者である。それは証拠のないことでどうにでもいえる。この女房たちも「六条院の御血筋が濃いと思うから、ことさらそう思ってしまうのかもしれない」と反省している。その反省、これが薫の出生をつゆ疑っていないことをあらわしている。彼女たちは信じて疑わない。が、幻想を信じているに過ぎないのだ。

その点は玉鬘も同様である。この女主人は

院（私注―六条院）の御心ばへを思ひ出聞えて、なぐさむ世なういみじうのみ思ほゆるを、その御形見には誰をかは見奉らん、右大臣（私注―夕霧）はことごとしき御有様にて、ついでなき

対面はかたきをなど宣ひて、はらからのつらに思ひ聞え給へれば…

と、光源氏養育の恩やその人柄を思うにつけ、薫を形見に見よう、きょうだいと思おうというのである。いよいよつゆほども疑っていないわけだが、その玉鬘がこうもいう。

大臣（私注―夕霧）はねびまさり給ふまゝに故院にいとようこそ覚え給へれ。この君は似給へる所も見え給はぬを、けはひのいとしめやかに、なまめいたるもてなしぞ、かの御若盛思ひやらるゝ。かうざまにぞおはしけむかし。

とうとう薫は光源氏に似ていないと喝破された。さきほど玉鬘の女房は容貌の事には触れなかったが、光源氏に親しく接し、夕霧ともしばらくきょうだいとして生活したことのある玉鬘が、「夕霧はだんだん似てくるが、薫は似ていない」と断言する。天を欺けぬ事実が厳然とあらわれているのだ。だが、信じこんでいる玉鬘はまだこの事実に疑念を挟もうともしないで、行き詰ると勝手な解釈をつけて辻褄を合わすのであった。光源氏のお若い盛りが思いやられる。こんな風でいらっしゃったのだろう。玉鬘が光源氏に養われたのは彼が三十六才のとき、中年すぎであった。だから彼女は自分の知らない光源氏青年時代をあてはめるのだ。それも「しめやかななまめいた」態度の点で。容貌のことはもういわないのである。そして、ごていねいにも

「…かうざまにぞおはしけむかし」など思ひ出で聞え給ひてうちしほれ給ふ。名残さへとまりたるかうばしさを人々はめでくつがへる。

玉鬘は勝手な幻想に感動して泣き出し、女房たちは〃めでくつがへる〃。偽りの上に立つ評価はかくのごとく、薫と世間との齟齬はかくのごとし。玉鬘と女房たちの動作の誇大な表現は皮肉な喰い違いを気付かせるためのものであろう。

だが、真実は姿をあらわそうとする。というより、そこに厳としてあるのだが、人がその意味に気付こうとしないのだというかのようである。玉鬘の女房たちは次のようなことも無心に告げる。あるとき、玉鬘はこういって薫に和琴を所望したと。

故致仕大臣（私注―昔の頭中将）の御爪音に通ひ給へると聞きわたるをまめやかにゆかしくなむ。

亡くなった致仕大臣とは玉鬘の実の父、すれば柏木の父、薫の祖父である。薫の和琴は祖父に似ているという評判が、「聞きわたるを」とあるからには、いつの間にか世間に立ち渡っているのだ。それは事実そうなのだろう。昔の人は、音楽の弾き方などは人の意識や意図を超えて、血縁の性癖や能力が遺伝すると強く考えていた。が、薫の場合、それを誰がどういう意味でいい出したのだろうか。世間の人々はどう受け取っていたのか。無知こそ恐ろしい事が平気でできる。玉鬘はつゆ疑ぐらないから、こういう事がいえたが、これだけ材料が揃っていて、誰かが何かのきっかけで、秘密に気付かないとは、どうして保証できよう。光源氏のときのようにあらを探している者はないか。何よりも本人の薫はどう思って聞いたのだろう。匂宮巻で、「かの過ぎ給ひにけんも安からぬ思ひに結ぼほれてや…世をかへても対面せまほしき…」と念じているから、実父についてかなりしかとした事を聞いている様子、いまこの言を聞いて動揺しないだろうか。匂宮巻を読み、いやもっと前からの物語を知っている読者にはこのあたり、数々の不安がむらがり湧いてくる

のだが、肝腎の点に不審を抱かぬこの家の女房には思いも及ばぬことで、そのみるところ、薫は「甘へて爪食ふべきことにもあらぬを」と思って少しばかり搔き鳴らしたとある。玉鬘の懇望が「まめやかにゆかしくなむ」と強い調子だったせいもあろうか。

…つねに見奉り睦びざりし親なれど、世におはせずなりにきと思ふに、いと心細きに、はかなきことのついでにも思ひいで奉るにいとあはれなる…

と述べる情も薫の心を打ったにちがいない。玉鬘が常に接することのなかった父を慕う気持は薫が「かの過ぎ給ひにけん人」に「世をかへても対面せまほし」く思う心と通い、読者にはあわれが泌みる。語り手は無知で感じない、意味あることも意味なきこともすべて我が主大事と映じたままを述べてゆくが、心知る聞き手にはその濃淡、人生の些事も恐ろしい符合もそれぞれにありありと見える。竹河巻はそのような効果を計算して、読者が参加する余地を非常に沢山とってつくってあると思う。

ところで、玉鬘はまだこういう。

大方この君はあやしう故大納言（私注—柏木）の御有様にいとよう覚え、琴の音などたゞそれとこそ覚え侍れ。

薫が和琴を弾く姿を見、音を聞いて、とうとう柏木に容貌も似ているなら、楽の音までそっくりだといい出すのである。彼女は六条院に養われていたころ、柏木の弾く和琴を聞いたことがある。かねて光源氏から、実父が和琴の上手と聞かされて、思慕の情は音楽の稽古のはげみにさえなっていた。柏木の和琴は、「げにかの父大臣の御爪音にをさをさ劣らずはなやかに面白し」とあった（篝火）。彼女は御簾の中から、まだ名乗れぬ実のきょうだいの弾く音に耳を澄まし、姿を凝視していたのである。光源氏に近く、しかも青年の日の柏木を見、その音楽の演奏を聞いたことのある玉鬘こそ薫が誰の子か見分ける証人なのだ。しかもいま彼女は証言している。が、それは証言にはならないのだ、疑わない玉鬘はこれだけの事実を前にしても、真実を悟りえないし、まして「源氏の御族にも離れ給へりし後の大殿わたり」の女房は真相に近づくべくもない。だのにこの人たちは「源氏の御末々にひが事どものまじりてきこゆるは…ひがごとにや」と自信一杯だ。自分たちの経験だけを唯一つ信じて、ちがったものの見方をして見ようともしない。

これが薫を取り巻く世間であった。不義の子である証拠を数々見せつけながら、その意味に気付かぬ、気付こうとせぬ人々にかしづかれている。偽りに悩み苦しめば、かえって世間の好感を増し、一層もてはやされて心に染まぬ栄華を重ねてゆく。竹河巻はそのような薫の存在を世間の中に浮び上らせることによって伝えようとするのである。〃社会の中で悩む薫〃——室内の、もしくは吹き抜き屋台の視点では捉えられぬ、これは遠景の薫である。それが技法的には光源氏一家とは別な家の女房に語らせるという異例の形式をとらしめた。そこでは本当に書きたいのは薫なのだが、それは暗々裡のことで、目の前に大きく派手に動くのは玉鬘の子女であったり、蔵人少将であったりする。薫はいわば海面を流れる潮流にたいして、底を流れる海流のようなもの、そんな底流の方が広い海を廻るように、薫も、蔵人少将や玉鬘の子女がこの巻限りで消えてゆくのに、過去をうけて未来につながってゆく人物だ。

遠景の薫、——世間の中に放り出された薫を描写しなければなら

なかったのは、この人物が世間のよしとする価値を否定するような意味を荷ってきたからである。世間と対立抗争するというのではないが、世間から弾き出され、世間を違った目で見直そうとするものが薫の中に生じてきている。竹河巻がなければ橋姫巻、宇治の世界に進めないというのはこういう意味からである。